

## 学習者の生活課題に寄り添った「国語表現」の授業実践

鎌田 高明

### 1 はじめに

表題に掲げた「生活課題」とは、「生徒が高校生活を営む際に時期ごとに直面していく様々な課題」という意味で用いている。高校生活の中では、生徒に、学習や部活動などの活動の他に、様々な生活課題をクリアさせていくが、この必然性をチャンスととらえて、「国語表現」の授業に取り込むことで、より言葉の力を身に付けさせる工夫を施した。

### 2 平成二十七年度「国語表現」のカリキュラムの概要

本実践は、発表者が勤務する香川県立高松商業高等学校で実施した。本校では、「国語表現」は、商業科のうち、商業科目の比率の高い「専門パターン」のカリキュラムで学ぶクラスで、三年次に三単位実施されている。教科書は『国語表現』（大修館書店）を用いてい

る。クラス全員四十名を対象に、分割せずに授業を行うため、使用できる手法には制限が多い。しかしその一方で多様な意見を集めることができる部分を活用したいと考えている。

発表者が平成二十七年度において実施した授業内容を、使用したワークシートの一覧を用いて次ページに示した。ワークシートは時間をかけて活用するものもあるが、概ね一〜数時間の小さな単元の連続となっている。

各単元の配列や素材は、学校のスケジュールや生徒の状況等を見つつ決めているため、系統性を持つものではない。しかし、大まかには、一学期には①自らが行っている言語表現を意図的に振り返らせる、②実社会での多様な意見の交錯の様子を分析的にとらえさせる、③自らを客観視してそれを語る言葉を探させる、等を、二学期には①グループで意見交換・集約をしつつ責任ある立場としての言語表現を行う、②行った言語表現に対する反省的思考をさせる、等をねらいとした単元構成である。

第1回	国語表現の授業の進め方
	「国語表現」の授業内容、評価方法等のガイダンスを行った。
第2回	きれいな文字を書くコツ
	整った文字を書く重要性を再確認し、「六度法」を用いて練習、意識付けを行った。
第3回	整った分かりやすい文を書く
	ねじれや解釈の揺れのある文を修正することで、注意深く文を書くことについて考えさせた。
第4回	敬語のしくみ
	敬語のしくみを再確認し、誤りやすい敬語表現の修正を行い、敬語の意味を考えさせた。
第5回	あたり前が一番むずかしい
	NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」よりパティシエ杉野英実氏の回を視聴させ、感想を書かせた。
第6回	外山滋比古「とにかく書いてみる」
	教科書教材の読解。こだわりを持って文章表現をすることの重要性を考えさせた。
第7回	今世の中で起こっていること
	最近のニュースをクイズ形式で尋ねた後、知っているニュースについてのディスカッションを行った。
第8回	水族館のイルカについて（その①）
	イルカの追い込み漁に関する新聞記事（1面記事）を読んで、問題状況を理解する。
第9回	水族館のイルカについて（その2）
	前回到続き、社会面の記事を読み、様々な関係者の意見の対立を読み取り、自らの意見を形成させた。
第10回	水族館のイルカについて（その3）
	生徒の意見をマインドマップを用いて分類した後、自らの主張を述べる小論文のプロットを作成させた。
第11回	自分を語る言葉をさがす
	次章で詳述。
第12回	香山リカ「それでいいです」
	教科書教材の読解。助詞の使い方ひとつで言葉の受け取り手に全く違う印象を与えることを学ばせた。
第13回	内田樹「働くことの意味」
	教科書教材の読解。労働の本質について語る文章を読んで、労働に対する意見形成をさせた。
第14回	クラスメートを語る言葉をさがす
	次章で詳述。
第15回	2学期の国語表現について
	2学期の「国語表現」のねらいを説明する一方、授業でやりたいことについての討論を行った。
第16回	モンスター・エクステンジ・プログラム
	イラストを言葉で表現することの難しさに気づき、同時に伝わる面白さを実感させる体験をさせた。
第17回	わかりやすい文章表現のために
	前回作成したプリントをグループで輪読して、わかりやすい表現のコツを考察させて発表させた。
第18回	わかりやすい文章構成のために
	「既知から未知へ」などのセオリーを示しつつ、読み手の立場に立った文章構成について説明した。
第19回	高商まるわかり展①テーマ設定
	公開授業週間に向けて、来校する中学生に本校の紹介をするポスターを作成させた。クラス全員でのブレインストーミングの結果を基に、各グループでテーマを決定させた。
第20回	高商まるわかり展②デザイン決定
	グループ毎に、各人が作成したデザイン案を突き合わせてポスターのデザインを決定させた。
第21回	高商まるわかり展③作成作業の振り返り
	4時間の作成作業を振り返って、分担の仕方や作成上の努力について作文の形でまとめさせた。
第22回	観点を決めてグラフを読む（次時の準備として）
	グループ毎にグラフの分析、結果の発表の後、グループ外の者の意見を受けて分析結果を反省させた。
第23回	高商まるわかり展を振り返る
	中学生、本校生、教員からの本音のコメントをもとに、制作したポスターの成否を振り返らせた。
第24回	みんなの夢まるため
	NHKスペシャル「みんなの夢まるため～やなせたかし“アンパンマン人生”」を視聴させ、感想を書かせた。

### 3 単元「自分を語る言葉」について

前ページの実践について、それぞれの詳細を報告して御意見を賜りたいところであるが、紙幅の都合もあり、本発表では特に単元「自分を語る言葉」を取り上げてご紹介したい。前章で示したワークシートでは、第11回と第14回にあたる。

#### (1) 単元全体の学習のねらい

表面的な目的は、就職試験や入学試験を念頭に置いた自己PR文の作成とそのため自己分析である。

従来の自己PR文作成のための指導としては、ワークシートを用いて、年代別の記憶に残る生活体験や、長所短所などの項目について書き出させることで、要点を整理させるものがある。元々表現力が豊かで文章を構成する能力が高い学習者であればこれで十分であるが、既有知識を掘り起こすだけの自己完結型の活動であるために、苦手な者にとっては月並みな結果しか生まないことが多い。(そもそもそのような学習者のための活動であるはずなのに。)

本実践では、以下の発想で従来の方法の改良を試みた。

- ①自己イメージを的確に表す言葉を既有知識の外部から探し当てる。
- ②学習者同士で言葉を交わしながら協同的に文章作成を進める。
- ③単なる文章作成に止まらず、自己認識の明確化や刷新を伴う体験となるようにする。

学校生活における生活課題である自己PR文作成を国語の力を身

につける学習活動としてとらえ直そうとしたものである。

#### (2) 単元の展開と指導のねらい

第一次「自分を語る言葉をさがす」(一時間)

- ① 学習のねらいについての説明を聞く。
- ② 二種類の性格診断テストに回答してみる。
- ③ 診断結果を精読し、どれくらい自分を言い当てているかを判断し、感想を書く。
- ④ ③の判断の根拠になった言葉を診断結果の説明文から抜き出してワークシートに記入する。
- ⑤ 学習者同士のフリートークの時間を設け、診断結果を見せ合う。うち一人からは、自分の診断結果に対するコメントを書いてもらう。

性格診断テストは「エニアグラム」(日本エニアグラム学会ホームページ <http://www.eniagram.jp> を参考に作成) および「性格タイプ診断テスト」(ポール・D・ティージャー/バーバラ・バロン著『あなたの天職が分かる16の性格』(主婦の友社 2008年)を使用した。これらを使用したのは、性格類型の説明の文章表現が比較的豊かであると思われるからである。

性格診断をすることは主目的ではなく、性格類型の説明文の中から、自分のことをびたりと言いついて感じられる表現を抽出することが目的である。性格類型の研究の中から導き出されたものであるため、その表現は、性格を克明に描写することによって、人

物像を彷彿とさせる力が強い。このような表現を呼び水とすることで、学習者に、月並みな表現で満足せず、よりの確な表現を求める意欲を喚起させようとした。

展開⑤は、形にとらわれずに学習者同士で話し合うことで、たった今発見したようなかすかな気づきを強化し合う効果があるために、重要な過程であると考えている。

第二次「クラスメートを語る言葉をさがす」(四時間)

第一時 プリント「性格を表すポジティブな言葉リスト」から、それぞれの学習者の性格を最も適切に表現する言葉を選び出し「個人別記入表」に記入する。

第二時 学習者が分担して「個人別記入表」の集計作業を行い、各学習者にクラス全員が選んだ言葉リストを配布する準備をする。

第三時(都合により30分程度の時間で実施)

① 自分向けの「個人票」を受け取り、ワークシートに貼り付け、各自考察をする。

② フリートークの時間を設け、親しいクラスメートと個人票を見せ合う。

第四時 これまでの学習の成果物等を参考にしつつ、自己PR文を四百字程度で作成する。

第一次は「自分が見た自分」を表現する言葉の探索であるとすれば、第二次は「他者が見た自分」を表現した言葉をもとに考察する学習である。

第一時には、指導者は一人一人よく吟味して最適な言葉を選ぶことを指示し続けた。例えば「明るい」「朗らか」「陽気」といった語感の微妙な違いをおろそかにせずに、最適な言葉を選択させることが、選択をする際の生徒への語彙指導という意味でも、受け取った際の生徒の気づきの深さの確保という意味でも重要だと思われる。

第三時②の展開で、フリートークの時間を設けたが、学習者はほとんど席を離れずに、第一次、第二次のワークシートを見直して考え込んでいるという状況になった。第四時には、文章の書き出しなど多少のアドバイスをする程度で、学習者は自発的に文章作成に向かっていた。

また、副次的な効果ではあるが、これから就職試験、入学試験に挑む際の自信や自己肯定感のようなものに幾分は寄与することができたかもしれない。

### (3) 学習成果の分析と考察

ある女子生徒の学習を取り上げて分析し、考察したい。

本実践を行ったクラスの学習者は、四月末頃に商業科の授業「総合実践」で次の【A】を書いている。一方、本単元を経て、七月に本学習者が書いた文章が【B】である。学習者は【A】を手元を持っていない状態で【B】を書いているため、【A】の内容は記憶裏にあるのみであり、【A】を改稿して【B】が作成されたわけではない。





【A】私の名前は○○です。高校では、吹奏楽部に所属していました。吹奏楽部にはモットーがあります。それは夢を思い出せ、夢を諦めるな、夢を追いかけるの三つです。この言葉たちには、どんなにつらい練習であっても、くじけずに目標を持って努力し続ければ夢に追いつけるという意味が込められています。部活動はほぼ休みがなく、忙しい中で検定やテストの勉強をするのはとても大変でした。しかし、諦めるのは駄目だ、自分に負けたくないと思い毎回粘り強く勉強して乗り越えてきました。そのため、多くの検定で合格することができ、テストでも比較的良好な成績を取ることができています。

また、お菓子を作ったり、絵を描いたりと創作することが好きなので、部活動が休みの日に、家でパンやお菓子などを作ったりしました。家族や友達に喜んでもらえた時は本当に嬉しかったです。

今後も、創作意欲をしっかりともち、新しいことや難しいことにとんどんチャレンジしていきたいです。

【B】私の名前は○○です。私は何事にも④コツコツと取り組むことができます。それは吹奏楽部の活動での活動や日々の勉強に表れます。楽器の練習は一日しないと一週間の遅れになるといわれます。ですから簡単な基礎練習でも毎日練習し、積み重ねていくことが大切です。曲の練習も大切ですが、土台となる⑧基礎練習をしっかりとしてきたので先生からも一目置かれる実力をつけることができました。また、商業高校に入学したからには多くの検定を取得しようと、一年生のころから検定のために勉強してきました。一度落

ちてしまった検定も、勉強をし直して二度目には合格することができました。

私が貴校を志望したのは、この③ねばり強さを生かした職に就きたいと思ったことと、⑩自分が作ったものを食べて「おいしい」と言ってくれる笑顔が好きだからです。何度も試作をしなければならぬ失敗の多いブーランジェエだからこそ、ねばり強さが必要になってくると思っています。ですから、部活動や検定によって培ったねばり強さを生かして、失敗を成功に変えていけるブーランジェエを目指したいです。

文章の書き出しや全体の構成は【A】を踏襲しているが、特に次に示すような点では、表現や発想に変容が見られる。(以下、①～⑩は作文中の表現、a～eはワークシート中の記述を指す)

①【A】では、「吹奏楽部のモットー」を紹介することで、高校生活で取り組んだことについて述べているが、【B】では、傍線部④「コツコツと取り組む」という自分の長所を前面に出し、吹奏楽部での取り組みをその具体例として用いている。「コツコツと取り組む」という表現は、ワークシートのaおよびbに見ることができ、さらに「自分らしさ」をよく理解してもらうための表現としてdで自ら取り上げている。

②吹奏楽の練習のうち、傍線部⑧のように基礎練習の重要性に焦点を当てることよって「クラスメートを語る言葉」から自ら抽出した③「地道」等の言葉から導かれたものと推測できる。【A】と比較して、より生徒自身の特質が詳細に語られていると考えられ

る。

③傍線部㉑「ねばり強さ」は【A】でもキーワードとして用いられている。しかし「自分に負けたくないと思ひ」という類型的な表現が、【B】では「一度落ちてしまった検定」への再挑戦という具体的なエピソードとともに語られることで説得力を増し、さらにそれが自らのブーランジェとしての適性を語る言葉としても用いられている。①～③を通して「コツコツと地道に取り組みねばり強さを持つている」という一貫したイメージで自分自身を表現しているため、より説得力のある強い主張を持つ文章になっていると考えられる。

④傍線部㉒に対応する部分は、【A】では「創作することが好き」としている。また、【A】では「家族や友達に喜んでもらえた」経験が語られているが、【B】は、ブーランジェとなった後の、客との触れ合いについて述べられている。ここにはクラスメートから送られた「おとなしい」印象を持つ現在の自分を変えていきたいと考えている、㉑「社交的になりたい」という意志が反映されていると考えられる。

これらの分析から、本単元を通して、本学習者は自分自身を的確に表現する言葉を探り当てる体験をしつつ自己イメージをより明確に認識するとともに、他者（性格診断テスト・クラスメート）の言葉の力を借りることで目指すべき自分の方向性を見出すという、全人的な変容を促される契機を得たと推測できる。その意味で、言葉の力を実感する学習活動となり得ていると考えられる。

【A】から【B】までの約二ヶ月の期間やその間の進路に対する意

識の変化や知識の獲得、また同じテーマで文章を書きなおすこと自体が持つ効果も当然ながらあると考えられる。しかし、【A】から【B】への変化には、本単元の体験が最も大きく影響していると言える。

#### 4 まとめ

本論文では、学習者の生活課題を「国語表現」の学習課題として取り込み、さらに自分自身のよりの確かな表現の探索という言葉の体験を学習者に与える単元を紹介した。このような単元を構想しようとした目的や問題意識について述べることでまとめたい。

##### (1) 「生徒」を「学習者」に変える

高校生ともなれば、多くの学習者は想像以上に高い言葉の力を持つている。例えば、卒業式の後に下級生から先輩に渡されるメッセージ、部活動の場で見せる生徒同士のやり取りなどでは、驚くような能力を発揮してコミュニケーションを取っている様子をしばしば見る。その自発的な生き生きした活動を見ていると、(私の拙い授業だからかもしれないが)、学習者は本気の力を出し惜しみしようと知恵を巡らしているように見えるほどである。

実際、生徒はいつも全力で授業に臨むわけではない。授業対象の生徒は高校が最終学歴となるものも多く、「学校知」を得ることへの内的な必然性は薄い。学校内外の授業以外の活動にも関心が割り振られるのも当然のことである。そもそも全力で思考する時間は、達

成感もあるが疲労も大きく、億劫なものだ。他の生徒の視線が気になつて恥ずかしくこともある。言語活動の体験は小学校から数こなしてきているために、例えば「コピペ」など、最小限の労力で頑張つたフリをする術に長けている者もいる。

しかし、既有的能力をただ發揮しただけの言語体験をすることは、新たな能力を獲得するための「学習」であるとは言いがたい。揺さぶられた結果、既有的の世界から一歩踏み出すことができてこそ、生徒は「学習者」となり、その言語体験は学習活動と言い得ると考えられる。

本単元は、「自己PR文」というキャッチーな課題を入り口として、自己イメージのとらえ直しという、学習者の内的な成長につながる普遍的な課題に対して、多面的な方法による言葉選びという言語活動を通して向き合わせようとしたものである。十分とはいえないものの、一定の成果を得たという感触を持っている。

## (2) 言葉のスキルの育成について

本単元での言語活動で必要とされるスキルは、高校生の学習としてはかなり易しいものである。それは、言語能力を高めるといふよりは、言語活動を通して思考するという目的のためにあえてそのように構成した。

本単元における言語操作は、考えるきっかけや、教室において会話や議論をする上での素材となるものなので、複雑で高度な言語活動を伴う活動ではかえつてうまくいかない。その言語活動を遂行することそのものに注意が向いてしまい、思考の方向に意識が向きに

くいからである。

一方、学習者にスキルを定着させるのは、一度の体験では難しい。同じ能力、スキルを用いる言語体験を、手を変え品を変えしながら飽きさせることなく、繰り返す必要がある。私の場合では、両方のねらいを同じ単元で目指そうとすると、どちらもうまくいかないということが多い。

## (3) 学習者の日常生活における言語活動と「国語表現」内における言語活動の関係について

学習者にとって、国語の授業時間中の言語活動は、日常生活全ての言語活動のうちのほんの一部分である。自明のことかもしれないが、日常の言語活動との関係を考えつつ、特に「国語表現」は進められるべきだと考えている。

現行の『学習指導要領』に規定されている「国語表現」の目標は以下のとおりである。

国語で適切かつ効果的に表現する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、言語感覚を磨き、進んで表現することによって言語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる。

後半の「言語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる」という学習の目標を鑑みると、本来であれば学習者が右記の態度を持って日常の言語生活を営むことができるようになってはじめて、この授業の目標は達成されることになるということではないだろうか。

これは恣意的な解釈であるかもしれないが、このような視野の広がり

を持って「国語表現」の授業を構想していきたいと考えている。

本誌『国語教育研究』第四十七号にある論考「教室を現実の中におく試み」で出雲俊江氏が紹介されている実践も、同じ商業高校での取り組みであることもあり、おそらく同様の教育現場発の問題意識によるものであると思われる。

また、文化審議会答申『これからの時代に求められる国語力について』（平成十六年二月）では、「国語教育は社会全体の課題」であるとした上で「国語教育に関し、特に重要な役割を担うのは学校教育である」という位置関係で国語教育について記されている。（一二二ページ）また「学校教育においては、国語科はもとより、各教科その他の教育活動全体の中で、適切かつ効果的な国語の教育が行われる必要がある。」（一五ページ）とある。さらに、中央教育審議会『教育課程企画特別会における論点整理』（平成二七年八月二六日）では、学習指導要領の次期改定に向けて、「言語の能力」は「国語科だけでなく、全ての教科で取り組まれるべきもの」であることが再確認されている。（補足資料（一）一四、一五ページ）学校教育がこのような方向に向かいつつある中で、教育活動全体の中の国語教育の役割は何であるかを再認識すること、また国語科において研究されてきた国語教育のノウハウを他教科や教科外の教育活動にも敷衍することで、より効果的な国語の教育を学校活動全体の中で行うことができるようにしていくことは、あながち無用なことではないのではないかと考えている。

（香川県立高松商業高等学校）